

シンポジウム

歯学士教育課程での プロフェッショナルリズム教育の構築

会期: 平成23年5月13日(金)10:00~16:00

会場: 九州歯科大学 講堂

(北九州市小倉北区真鶴2丁目6-1)

主催: 九州歯科大学 総合診療学分野

ご挨拶

九州歯科大学 総合診療学分野
教授 寺下正道

今回、プロフェッショナリズムをテーマとするシンポジウムを企画したところ、多くの方々の賛同を得、開催する運びとなりました。開催に当たり、特別講演の講師、事例発表の演者、座長の労を執っていただき先生に厚くお礼申し上げます。

医療人にとってプロフェッショナリズムが必要であるということは理解出来ても、プロフェッショナリズムが何なのかを正確に説明出来る方は少ないと思います。参加された方々がシンポジウムを通してプロフェッショナリズムをどうとらえるのか、どのように育んで行くのか等に対する解答を探すきっかけになることを望んでいます。

シンポジウムの企画について

九州歯科大学 総合診療学分野
准教授 木尾哲朗

プロフェッショナリズムを日本語大辞典で調べると「自分の専門的職業意識。自分の職業やそのための技能・専門知識に強い自負心と探求心をもち、社会的責任を自覚すること。プロ意識。」とある。佐藤学氏は和訳本の訳者序文に『「専門職(profession)」という言葉は、その語源において「神の宣託(profess)」を受けた者を意味している。最初に専門職と呼ばれたのは牧師であり、次いで大学教授、医者、弁護士であり、いずれも神の仕事の代行者であり、神の意思を遂行することを使命としていた。(一部改編)」と述べており、その原著者のMIT名誉教授Donald A. Schön氏はスペシャリストと区別した上でプロフェッショナルを“reflective Practitioner”(反省的実践家、省察する臨床家)と述べている。¹⁾

OSCEの開発者R. Hardenの3 circle modelの最外側円はプロフェッショナリズムを意味しており、欧州や米国の歯学教育学会では歯学生が卒業する際に身につけておくコンピテンスに下記のように6～7のメジャードメインとして掲げ、そのひとつはプロフェッショナリズムとなっている。

このような世界的潮流の中、国内では日本医学教育学会倫理・プロフェッショナリズム委員会は昨年末に「プロフェッショナリズム教育カリキュラムに関する提言」を行い、セミナーや指導者養成ワークショップを実施している。そこで今回、歯学教育におけるプロフェッショナリズムを考える機会として、本シンポジウムを企画するものである。

【欧州歯学教育学会(09年)】²⁾

- I. Professionalism
- II. Interpersonal, Communication and Social Skills
- III. Knowledge Base, Information and Information Literacy
- IV. Clinical Information Gathering
- V. Diagnosis and Treatment Planning
- VI. Therapy: Establishing and Maintaining Oral Health
- VII. Prevention and Health Promotion

【米国歯科医学教育学会(08年)】³⁾

- I. Critical Thinking
- II. Professionalism
- III. Communication and Interpersonal Skills
- IV. Health Promotion
- V. Practice Management and Informatics
- VI. Patient Care

1) Donald A. Schön, 佐藤学・秋田喜代美訳「専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える」ゆりみ出版 2001.

2) Profile and competences for graduating European dentist- update 2009. より抜粋

3) Competences for the New General Dentistより抜粋

概 要

1. 対象者: 歯科医療者養成機関教員および職員、プロフェッショナリズム教育関係者
2. 開催日時: 平成23年5月13日(金)10時～16時
3. 開催場所: 九州歯科大学講堂 北九州市小倉北区真鶴2丁目6-1
4. 主催: 九州歯科大学総合診療学分野

5. スケジュール

9:30 受付開始

10:00 開会あいさつ

10:10 シンポジウム趣旨説明

10:20～11:50

セッション1 特別講演

講演1: 座長 俣木志朗 (日本歯科医学教育学会理事長)

「医療プロフェッショナリズムの定義と教育について」

天野隆弘 (国際医療福祉大学 副大学院長・教授、山王メディカルセンター 院長)

講演2: 座長 西原達次 (九州歯科大学学部長)

「医療人育成のためのプロフェッショナリズム教育」

藤崎和彦 (岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 教授)

12:50～14:20

セッション2 事例発表

座長 木尾哲朗 (九州歯科大学准教授)

吉田登志子 (岡山大学医学教育統合開発センター)

事例発表1:「初年次PBLにおけるプロフェッショナリズム教育」

田地 豪 (広島大学大学院医歯薬学総合研究科 口腔健康科学講座

口腔生物工学分野)

事例発表2:「医学生のプロフェッショナリズムを育てる:

地域住民との交流によるコミュニケーション教育の取り組み」

阿部恵子 (名古屋大学大学院医学系研究科地域医療教育学講座)

事例発表3:「徳島大学歯学部が取り組む学外授業」

大石美佳 (徳島大学大学院 HBS研究部 総合診療歯科学分野)

事例報告4:「九州歯科大学におけるプロフェッショナルリズム教育」

永松 浩 (九州歯科大学総合診療学分野)

事例発表5:「プロフェッショナルリズム教育の現状

-東京医科歯科大学歯学部歯学科での一例-

鶴田 潤 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科

医療政策学講座歯学教育開発学分野講師

東京医科歯科大学医歯学融合教育支援センター 講師)

事例発表6:「研修歯科医自身が考える自己目標とプロフェッショナルリズム」

鬼塚千絵 (九州歯科大学総合診療学分野)

14:30~15:10

セッション3 特別講演

講演3:

座長 小川哲次 (広島大学病院教授)

「プロフェッショナルリズムの教育と評価」

大西弘高 (東京大学医学教育国際協力研究センター 講師)

15:10~16:00

セッション4 総合討論

座長 小川哲次 (広島大学病院教授)

木尾哲朗 (九州歯科大学准教授)

16:00 閉会の辞

18:00 懇親会(ホテルニュータガワ)

セッション1 講演

特別講演 1

座長 俣木志朗（日本歯科医学教育学会理事長）

医療プロフェッショナリズムの定義と教育について

What is medical professionalism? How do we teach it?



国際医療福祉大学 副大学院長、教授

山王メディカルセンター 院長

天野 隆弘

欧米では、医に求められる規範について種々の変遷を経てきた。最初のものはヒポクラテスの誓いとして知られている。長らく欧米の医学部卒業式などで宣誓されてきた。第二次大戦後、ヒポクラテスの誓いの現代的解釈の必要性が世界医師会で提案され、これは世界医師会によるジュネーブ宣言、医の国際倫理綱領へと変遷してきた。一方、科学の進歩と共に、生命倫理の重要性が唱えられ研究されてきた。このような中で、Professionalismを意識した医療教育の重要性が提唱され、米国内科専門医学会によるProject Professionalism（1992）、新ミレニアムにおける医療プロフェッショナリズム：医師憲章（2002）などが発表されてきた。

医師憲章では3つの基本的原則（患者の福利優先、患者の自律性、社会正義）と10の責務（プロフェッショナルとしての能力、患者に対して正直である責務、患者の秘密を守る責務、患者との適切な関係を維持する責務、医療の質を向上させる責務、医療へのアクセスを向上させる責務、有限の医療資源の適正配置に関する責務、科学的な知識に関する責務、利害の衝突の管理により信頼を維持する責務、プロフェッショナル（専門職）の責任を果たす責務）を明示している。社会に向けた取組みを進める活動を積極的にしなければならないと医師の社会的責任の重要性も強調している。

医療を取り巻く社会的環境が厳しくなっていることに反映されて、米国では医療プロフェッショナリズムMedical Professionalismを意識した教育が大学病院や教育病院で推進されてきた。しかし、この姿勢の必要性は特定の国や地域の問題ではないことは言うまでも無い。Professionalismの定義として、David T. Stern教授が編集した“Measuring Medical Professionalism”（2006年）での図説が有名である。そこでは、「臨床能力（医学的知識・スキル）」、「コミュニケーション・スキル」、「倫理的理解および法的理解」を基盤にしてその上に立つ、「卓越性」、「ヒューマニズム」、「説明責任」、「利他主義」を四本柱に医療プロフェッショナリズムが成り立つと説明されている。

本講演では、医療のプロフェッションであるからこそ、求められる、守るべき医療規範、医の心とは何か、具体的に論議したい。

あまのたかひろ

天野隆弘 先生 ご略歴

昭和45年 3月 慶應義塾大学医学部卒業、4月 同 内科学教育助手
昭和46年 4月－昭和50年 3月 慶應義塾大学大学院医学研究科（内科学専攻）
昭和55年 1月－昭和57年 2月 アメリカBaylor 医科大学、神経内科 Research Associate
昭和57年 3月 慶應義塾大学医学部助手（内科学教室）
昭和58年 5月－昭和61年 1月 大田原赤十字病院 第一内科部長、神経内科部長
昭和61年 2月－平成15年 6月 慶應義塾大学医学部専任講師（内科学）
平成15年 7月－平成17年 6月 慶應義塾大学医学部助教授
平成16年 4月－平成21年 3月 慶應義塾大学医学部医学教育統轄センター長
平成17年 7月－平成21年 3月 慶應義塾大学医学部教授
平成21年 4月－現在 国際医療福祉大学教授、医学教育研修センター長
慶應義塾大学客員教授
国際医療福祉大学塩谷病院副院長を兼任（平成21年9月まで）
平成21年10月－現在 山王メディカルセンター 院長
平成22年 4月－現在 国際医療福祉大学 副大学院長

セッション1 講演

特別講演 2

座長 西原達次（九州歯科大学学部長）

医療人育成のためのプロフェッショナリズム教育

Professionalism education for health personals



岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 教授

藤崎和彦

今世紀を迎え世界的にプロフェッショナリズム教育が注目を集めるようになるなかで、21世紀型のプロフェッショナリズムとは、高い専門的能力（medical excellence）と人間性（humanism）、社会性（人権と社会的アカウンタビリティ）、利他主義（利己主義、身内主義の否定）の4つの軸を基に考えられるようになってきている。また、行動科学を核としたプロフェッショナリズム教育が養成期間（4年～6年）を通じて毎週半日は行われるようなカリキュラムが普及してきている。また、アウトカム基盤型教育が提唱され、技能・態度面の教育のアウトカムとして「プロフェッショナリズム」に注目が集まってきた。さらには、プロフェッショナリズム教育のゴールとして「振り返りする専門家（reflective practitioner）」が重視されるようになってきており、個人的なふりかえりの態度（reflection）を刺激する重要なtoolとしてポートフォリオがプロフェッショナリズムの教育に導入されてきている。こういった流れを受け岐阜大学医学部では、継続性（6年間を通しての継続的関わりを目指す）とリフレクション（ポートフォリオを用い、自身の学びや到達、課題を自己省察する姿勢を身に付ける）をキーコンセプトに教育カリキュラム開発を行っている。しかし、プロフェッショナリズム教育のゴールは、あくまでも個々の学生・医療者が個人的に努力をして良い医療人になれば良いというようなことではなく、職能集団としての自律性（オートノミー）が機能して、集団内で逸脱行為が内的にコントロールされ、そのことが社会的・外的にも認知・信頼されるようなメンバーシップが個々の医療人のなかに確立していくことであって、そのための我が国における医療人育成のためのプロフェッショナリズム教育のあり方について考えていきたい。

ふじさきかずひこ

藤崎和彦 先生 ご略歴

昭和60年 3月	北海道大学医学部医学科卒業
平成 1年 9月	大阪大学大学院医学研究科博士課程単位取得退学
平成 1年10月	奈良県立医科大学衛生学教室助手
平成13年 4月	岐阜大学医学部医学教育開発研究センター助教授
平成17年 6月	岐阜大学医学部医学教育開発研究センター教授

セッション3 講演

特別講演 3

座長 小川哲次（広島大学病院教授）

プロフェッショナリズムの教育と評価

Education and Assessment for Professionalism



東京大学医学教育国際協力研究センター

大西 弘高

医療者は、患者の医療ニーズに対応するために、患者自身が有している健康問題を医療面接による情報収集、身体診察、各種検査などによって明らかにし、それぞれの患者に最もよいと考えられる治療・マネジメントを行っていくサービス提供者である。他の人間に傷害を負わせる可能性のある行為であっても、業務独占資格を持つ医療者側が説明をし、患者が理解した上で同意していれば、そのような医療行為が認められる。そのような関係が成り立つのは、社会が医療者に対して健康問題を解決してもらいたいという期待を抱き、医療者がその目的のために十分な学習や経験を積んでいるという信頼があるからである。しかし、近年医療が複雑化し、患者や社会からの期待が高まると共に、医療事故などから来る不信も大きくなって、医療者側に厳しい目が向けられるようになった。

このような状況において、医療者が医療専門職として適切な教育を提供しているかが問われるようになり、アウトカム基盤型教育の考え方が広まりつつある。また、従来の生命倫理、医療（臨床）倫理の考え方をより広い観点で捉え直したプロフェッショナリズムは、2000年以降再定義された上で、アウトカム基盤型教育の中心をなすに至っている。

しかし、実際にはプロフェッショナリズムの教育や評価は簡単ではない。教育現場では、計画されたカリキュラムだけでなく潜在的カリキュラムの存在にも目を向ける必要がある。また、臨床前教育から臨床実習、臨床研修へと連続性を持たせることにも配慮しなければならない。一方、評価に関しては、ポートフォリオ評価、360度評価、P-MEXなど、実際の業務に基づいた評価（work-based assessment）手法が広がりつつある。ただ、そもそも学習者が現場での業務に十分参加できていないこと、指導側（評価側）の人的資源が不足しがちなことから、理想的な実践にはつながりにくい現状がある。

当日は、これらの内容に関して概説し、後のディスカッションへとつなげていきたい。

おおにしひろたか

大西弘高 先生 ご略歴

略歴

1992年 奈良県立医科大学卒業
1992-97年 天理よろづ相談所病院で初期および後期研修(総合内科)
1997年より 佐賀医科大学附属病院総合診療部
2000-02年 イリノイ大学医学教育部で医療者教育学修士課程修了
2003-05年 国際医科大学(マレーシア)医学教育研究室
2005年より 東京大学医学教育国際協力研究センター

主な著書

実例からみる卒後臨床研修(篠原出版新社)
PBLテュートリアルガイド(南山堂)
新医学教育学入門(医学書院)
医療コミュニケーション実践マニュアル(ぜんにち出版)
困りがちなあんな場面こんな場面での身体診察のコツ(羊土社)

訳書

医学教育プログラム開発(篠原出版新社)
外来で教える(南山堂)
セイントとフランシスの臨床実習・研修ガイド—診察の仕方から業務のコツまで—(丸善)

現在

日本医学教育学会理事
日本プライマリ・ケア連合学会理事
日本医療教授システム学会雑誌「医療者の能力開発」編集委員長
共用試験医学系OSCE事後評価解析小委員会解析担当委員
など

セッション2 事例発表 座長 木尾哲朗（九州歯科大学准教授）

吉田登志子（岡山大学医学教育統合開発センター）

事例発表 1

初年次PBLにおけるプロフェッショナルリズム教育

広島大学大学院医歯薬学総合研究科 口腔健康科学講座 口腔生物工学分野

田地 豪

広島大学歯学部は、3つの理念（1. 高度な医療技術と学識、豊かな人間性を備えた歯科医療人の育成 2. 国際的に活躍できる歯科医学分野の教育者・研究者の育成 3. 地域医療と歯科医学分野への貢献）のもと、2つの学科において歯科医学・医療、口腔保健および福祉の分野で、人と社会のために貢献する人材の育成を目指している。歯学科では、歯科医師となるために必要な基本的教育を提供するとともに、ユニークな教育システムとしてコース制（最先端歯学研究コースと臨床歯科医学コース）を導入し、歯科医学・歯科医療の多様化と学生の個性や価値観の多様性に対応できるようにしている。また、口腔健康科学科は、4年制の歯科衛生士・歯科技工士養成機関であるが、口腔健康科学のリーダーとして、新しい歯科医療分野に関する学問領域の開拓をすすめている。

これら2つの学科のプロフェッショナルリズム教育を計画する際には、将来のチーム医療を構成する職種であることを念頭に置き、interprofessional education（専門職種間教育）を踏まえた教育を考える必要がある。初年次には、医・歯・薬学部合同のオリエンテーションキャンプや歯学部2学科合同の「教養ゼミ」を通じて、他学部・学科の学生との交流を促している。「教養ゼミ」の授業では、平成21年度からPBLチュートリアル教育を採り入れ、歯学部2学科の学生約100名を13のグループに分け、90分15回の授業で3つの課題に取り組んでいる。初年次学生が対象であるため、自己主導型学習の修得を目標の中心に置き、コミュニケーション能力の修得、キャリアパスの理解、省察の実践などを目指して授業を計画しているが、3つの課題のうち1つは学士課程教育やキャリアパスについてグループ討論できる課題となるように心がけている。

本シンポジウムでは、我々の行っている初年次PBLチュートリアル教育を紹介し、皆様と一緒にプロフェッショナルリズム教育について考えてみたい。

事例発表 2**医学生のプロフェッショナリズムを育てる：
地域住民との交流によるコミュニケーション教育の取り組み**

名古屋大学大学院医学系研究科地域医療教育学講座

阿部恵子

人間関係が希薄な時代と言われる近年、集団の中でこそ学ぶことができる人間関係やコミュニケーション能力を身につける機会が減少している。医療者はさまざまな世代の患者を治療するプロフェッショナルとして社会に期待されている。これらを背景に、医学生が地域住民との交流を通して、自分と向き合い、人と向き合い、そして、自己を振り返る機会を継続的に持つことで自分自身のコミュニケーションの仕方と態度を見直すという地域体験実習が、プロフェッショナリズム育成の一環としてH20年度より導入された。

実習では、1年次の医学生が保育園（2施設）、マタニティクリニック（2施設）、高齢者施設（1施設）で8週間（木曜午前）、同じ対象者と継続的に交流を行う。実習に先立って、妊婦・高齢者群は模擬患者との模擬交流、保育園児はこどもの発達に関するビデオ視聴し、準備教育をおこなった。実習中、学生はe-ポートフォリオにて振り返りを行い、教員はフィードバックを書き込むという双方向のやりとりで、学生一人一人に対して密な関わりをし、気づきを促した。最終日のまとめの発表会では施設毎の発表後、施設混合班にて、一人の人間の生涯をライフサイクルの視点でまとめ発表した。

e-ポートフォリオの分析から、学生は、初期は緊張感が強く実習をうまくこなすという点で、関心の中心は学生自身にあったのが、実習が進むにつれコミュニケーションスキルを具体的な方略と捉え、関心の中心が対象者に向けられるようになった。そして、より良い方法を模索する中で、関係構築を実感するに至った。これらのことから、e-ポートフォリオによる振り返りと教員のフィードバックやサポートを重視した地域住民参加の実習は、医学生の社会人としてのコミュニケーションの基盤作りに効果的に働き、プロフェッショナリズム育成に貢献したと考えられる。また、実習後のアンケートから、地域住民の参加による実習が学生に大きな学習効果をもたらすだけでなく交流対象者にも有意義であることが示唆された。一方で、妊婦のリクルートの困難さ、指導者の時間確保、不適應学生への対応など、今後の課題が残されている。

事例発表 3

徳島大学歯学部が取り組む学外授業

徳島大学大学院 HBS研究部 総合診療歯科学分野

大石美佳

5年前に徳島大学が全学部の全学年対象に行った「学生満足度調査」において、すべての学科、学年の中で抜き出た当時の歯学部4年生の多くが、「目的が見えない。」「やる気が起こらない。」という項目を選択していた。この結果に問題を感じた歯学部学生委員会は、この実情を改善するための一つの方策として、4年生に、クラス内のコミュニケーションを高め、歯科医師となるための意識を学生自ら気づかせ、学生に「夢を与え、夢を持たせる」「夢企画」という合宿研修を実施することにした。これには、10年以上行っている新入生の合宿研修のノウハウが役立った。自然の自由な雰囲気の中でコミュニケーションゲームや海洋プログラム（カヤックなど）を行い、またワークショップでチーム医療や大学で学ぶ意義などを討論し合う。義務ということで参加した学生からも終わった後は「楽しかった」「参加してよかった」という高い評価を受けた。初年度は、歯学部4年生だけの参加であったが、その後、薬学部と栄養学科の学生（4年生と大学院生）を交え、また2年前からは、歯学部新しく出来た口腔保健学科の2年生も参加している。現在、この合宿は、それぞれの学科の学生が、自分の将来の専門職の意義を認識自覚し、さらにお互いを理解し合う場となっている。しかしこのプログラムも、授業単位に含まれていないため、欠席する学生がいたり、予算をどこから調達し、如何に継続するかという課題を抱えている。

また歯学部には10年以上前から実施している「早期体験実習」というプログラムがある。これは各講座で歯学部2年生に歯科の専門分野を体験させるものであるが、2年前から高齢者福祉施設を訪問して、口腔機能訓練の見学や補助を行うプログラムを導入した。歯科の専門知識をほとんど持たない学生達ではあるが、この実習後、自分たちがこれからどのような目標を持ち、学ばなければならないかを意識し始めるようである。

徳島大学は、医学部（医学科、栄養学科、保健学科）歯学部（歯学科、口腔保健学科）薬学部の6つの医療系学科がある。この恵まれた環境を利用し、歯学部は、歯学科2、3年の学生と栄養学専攻大学院生とのNST活動への参加による体験学習や、口腔保健学科と保健学科の学生による社会福祉士としての合同PBLなどを行い、IPE/IPWにも取り組んでいるので、これらも含めて事例報告を行いたい。

事例発表 4

九州歯科大学におけるプロフェッショナリズム教育

九州歯科大学総合診療学分野

永松 浩

九州歯科大学では良好なコミュニケーションの構築の仕方、歯学部学生として取るべき学びの姿勢、医療人として求められる態度などについて、1年次生から6年次生、さらに臨床研修歯科医にわたり到達目標に向かって方略を変えながらあたかも“らせん階段”を登って行くように医療コミュニケーションおよびプロフェッショナリズム教育を実践している。

具体的には、1年次の1泊2日の合宿研修では、“歯科医療人を考える”というテーマのもと、大学からのメッセージ、上級生や大学院生の体験談、コミュニケーションゲームを通して歯学部生としてこれから学んでいくことへの気付きを促し、卒業するまでの間、歯学部学生としてどのような学びの態度をとるべきかについてグループ単位で議論し、誓いの言葉としてまとめている。3、4年次生の医療コミュニケーションⅡ、Ⅲの講義・演習では医療人として身につけておくべきコミュニケーションスキルの獲得と将来接する異世代に対する言葉や態度の上での配慮について学び、3年次の医療行動学では、医療人としての態度および与えられたテーマについてその考えに至るまでの討論の仕方について学んでいる。

臨床実習開始前には、登院セレモニーを行い、大学章(バッジ)を授与されたのち登院に向けて宣誓を行っている。またそれに続く準備登院では、プロフェッショナリズムについて考える機会を作り、登院に際して誓いの言葉を自ら到達・実践すべきこととしてグループ検討してまとめている。

連携科目としては他に2、3年次の歯科医師入門学や2年次の医療コミュニケーションⅠがあり、歯学士教育課程終了後の臨床研修歯科医においてもらせん型教育を継続しており、研修開始時の1泊2日の合宿研修では、歯科医師として、あるいは社会人として行うべきことについてグループ討論をしている。さらに研修の途中ではSEAを行い、臨床上遭遇した困ったことなどについて、うまくいったこといかなかったこと、どうすればよかったか、今後どうしたらよいかについて討論している。

このように、本学ではプロフェッショナリズム教育をベースにしたらせん型教育を実践しているが、今回はその一部について具体事例を交えて紹介し、考察を加えて報告したいと思う。

事例発表 5

プロフェッショナルリズム教育の現状 - 東京医科歯科大学歯学部歯学科での一例 -

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 医療政策学講座歯学教育開発学分野講師
東京医科歯科大学医歯学融合教育支援センター 講師

鶴田 潤

プロフェッショナルリズムのもととなる『プロフェッション』については、人により様々な定義を持つと思うが、私自身の考えでは、高度専門職業人として仕事を実践する際に、十分な専門的知識を有し、公衆に対しその責務を全うする人材と考える。一人の人間の行動様式の変容、倫理観の醸成を目的とするこの教育は、単なる講義だけで実現できるものではなく、業務実践の場での教育が必須であると思われる。一方、高度専門職業人として期待される『気質』自体、社会文化的背景、時代等の環境要因により変化する可能性があるとともに、教育を受ける側、すなわち学生の『気質』の変化があるため、教育現場のあり方も柔軟性をもって対応をしていく必要があると考える。

東京医科歯科大学歯学部歯学科では、伝統的に、5年後期から6年にかけて診療参加型臨床実習を行ってきたが、特に2003年度導入のカリキュラムでは、歯学教育モデル・コア・カリキュラムを基礎に、高度専門職業人として生活体験を行う期間をカリキュラムに設定している。『研究者』として研究室で2ヶ月間を過ごす『研究体験実習』（4年）、歯科医師『臨床家』の現場でその実際に触れる『臨床体験実習』（3、4年）、『包括臨床実習』（5、6年）等のモジュールでは、教員がいわゆる『指導者』としてだけではなく、『プロフェッション』の生活を身近に示すことで、将来職業人として求められる行動・責務・規律を学生が五感で感じ、学ぶことができる機会を提供している。

本発表では、本学歯学科カリキュラム各モジュールで行われている教育内容を示すとともに、私見とはなるが、歯科医学教育におけるプロフェッショナルリズム教育のあり方について、海外での例を参考に、臨床現場をより一層意識した教育のあり方を述べさせていただきたいと思う。

事例発表 6

研修歯科医自身が考える自己目標と プロフェッショナリズム

九州歯科大学 総合診療学分野

鬼塚千絵

歯科医師人生の第一歩を踏み出したばかりの研修歯科医が思い描く将来像は様々であり、それぞれの目標は異なっている。その自己目標とプロフェッショナリズムとの関係进行分析し、興味ある知見が得られたので報告する。


平成21、22年の本学附属病院総合歯科所属の研修歯科医を対象に、研修初期の4月に、「一年後の私に期待する全てのこと」をテーマとし、8つの自己目標を、さらにその自己目標を達成するために必要な方略をそれぞれ8つ書く記述式アンケート調査を行った。自己目標については歯科医師臨床研修に限定せず、なりたい自分（自己実現の全て）とした。研修歯科医が考える自己目標は9つのカテゴリーに分類することができた。歯科に関するカテゴリーとしては、「治療手技の上達」「患者・スタッフとの対人関係構築の上達」「歯科医師としての心構え」「知識の向上」、歯科以外のカテゴリーでは「健康」「人間性の向上」「人間関係」「社会経済」「進路」に分類できた。また、ADEAによる声明で示されている「Six values-based statements」のうちの、「Competence」、「Fairness」、「Integrity」、「Responsibility」、「Respect」、「Service-mindedness」に分類すると、研修歯科医が考える自己目標は「Competence」に集約された。

プロフェッショナリズムとは、常に「高み」を目指して追い求め続けるものという意味では、ワークライフバランスも考慮した研修歯科医の自己目標は興味を持てる内容であった。これらの結果を踏まえて「歯学士教育課程のプロフェッショナリズム」について議論したいと思う。

セッション4 総合討論

座長 小川哲次（広島大学病院教授）

木尾哲朗（九州歯科大学准教授）



シンポジウム「歯学士教育課程でのプロフェッショナル
リズム教育の構築」

発行日：平成23年5月12日

発行：九州歯科大学総合診療学分野

北九州市小倉北区真鶴2丁目6-1

編集：木尾哲朗、永松浩

印刷所：AMC 北九州市小倉南区沼南町3丁目10-5